モグーリスターン遊牧社会史序説

間　野　英　二

はしがき

私は，先に『東洋史研究』第23巻第1号に，「十五世紀初頭のモグーリスターン——ヴァイス汗の時代——」と題する論文を発表し，十五世紀初頭のモグーリスターン・ハーン国史に関する主要な諸問題について概観した事があったが，その際，研究の必要性を痛感しつつも，時代を限定した事もあって，ハーン国の社会については，ほとんどふれる事が出来なかった。本稿は，この缺を補うべく，主として根本史料 Ta'rīkh-i Rashīdī の記述に依拠しつつ，モグーリスターン社会の重要な諸問題について，概観しようとするものである。

解明すべき問題はきわめて多いが，本稿では，この社会が基本的には遊牧を主たる生活型態とするいわゆる遊牧社会である点に鑑みて，この社会に如何なる遊牧系諸集団が活動し，またそれらの諸集団が，如何なる組織の下に一つの国家＝モグール・ウルスを形成していたか，そしてさらに，それらの諸集団の活動が，モグーリスターン社会に如何なる歴史的性格を与えていたか，といった問題に焦点をあてながら，記述を進める事にしたい。

モグーリスターン社会に関する他の重要な諸問題，例えばモグーリスターン・ハーンの史的性格とか，ハーン国内におけるイスラーム聖職者達の地位等々については，別の機会に論ずる事として，ここでは一切取扱わない事とする。なお，主要文献の略称は次の如くである[1)]。

TR: A History of the Moghuls of Central Asia, being the Tarikh-i-Rashidi of Mirza Muhammad Haidar, Dughlát. An English Version. Edited, with Commentary, Notes, and Map by N. Elias. The Translation by E. Denison Ross. London, 1895.

TR, ms.: Muḥammad Ḥaidar, Ta'rīkh-i Rashīdī. MS. British Museum Or. 157.

Bābur: The Bābur-nāma in English (Memoirs of Bābur), translated from the

original Turki Text of Ẓāhiru'-d-dīn Muḥammad Bābur Pādshāh Ghāzī by Annete Susannah Beveridge. Vol. I, London, 1922.

Barthold, Semirechyé: V. V. Barthold, History of the Semirechyé. Four Studies on the History of Central Asia, translated from the Russian by V. and T. Minorsky, Vol. I, Leiden, 1962.

Barthold, Ulugh-Beg: V. V. Barthold, Ulugh-Beg. Four Studies, Vol. II, Leiden, 1958.

Ḥāfiẓ-i Abrū: Ḥāfiẓ-i Abrū, Zubdat al-Tavārīkh, ed. Felix Tauer, Monografie Archivu Orientálního, Vol. V, Tome II, Praha, 1956.

Krader: L. Krader, Social Organization of the Mongol-Turkic Pastoral Nomads, The Hague, 1963.

Niẓām al-Dīn: Niẓām al-Dīn Shāmī, Ẓafar Nāma, ed. Felix Tauer, Monografie Archivu Orientálního, Vol. V, Tome I, Praha, 1937.

Rashīd: Rashīd al-Dīn Faẓl Allah, Jāmi' al-Tavārīkh, I-1, ed. A. A. Romaskevich, A. A. Khetagurov, A. A. Ali-zade, Moskva, 1965.

Rashīd/Karīmī: Rashīd al-Dīn FaẓlAllah, Jāmi' al-Tavārīkh, Vol. I, ed. Bahman Karīmī, Tehrān, 1338.

Sharaf al-Dīn: Sharaf al-Dīn 'Alī Yazdī, Ẓafar Nāma, Vol. I, ed. Muḥammad 'Abbāsī, Tehrān, 1336.

実録：那珂通世訳注，『成吉思汗実録』，東京，昭和18年。

嶋田，ベク達：嶋田襄平，「ホーヂャ時代のベク達」，『東方学』3，70～78頁。

I　モグーリスターンの遊牧系諸集団

諸史料の中から，モグーリスターンに活動した遊牧系諸集団の名称を抽出するという，基本的な作業から始める事にしたい。何故なら，モグーリスターン社会については，従来この様な基礎的な研究すら，全く行われていない現状にあるからである。

さて，根本史料 Ta'rīkh-i Rashīdī の中で，モグーリスターンに活動した遊牧系諸集団について，最もまとまった記述のみられるのは，その第2部第43章である（TR, pp. 305～10；TR, ms., 224 a～228 a)。この章は，回暦920年（西暦1515年）に行われた Sulṭān Sa'īd Khān の Kāshghar 遠征軍に加わったモグーリスターンの有力諸集団の兵員査閲名簿の写しとでもいうべき章で，そこには，如何なる集団が，如何なる首長達に将いられて，如何程の人数でこの遠征に従軍したかが，きわめて明確に記述されている。いま，あまりに長文に渉るのでその記述を引用する事をさしひかえるが，そこに記

された諸集団の内で，最も重要な諸集団が，次に列挙する九つの集団である。

① Dūghlāt　② Dūkhtūī　③ Barlās　④ Bārqī
⑤ Ūrdū-bīgī　⑥ Ītārchī[2]　⑦ Kūnjī[3]　⑧ Jarās[4]
⑨ Bīgchik[5]

Ta'rīkh-i Rashīdī の著者 Mīrzā Ḥaidar によれば，これらの九集団は，すべて後述するモグーリスターンの貴族的身分＝Amīr を擁した重要な諸集団であるが，問題の兵員査閲名簿には，これらの九集団の他に，Amīr を擁してはいなかったものの，それぞれの長達に将いられて，この遠征に参加した四つの集団の名称が記載されている。すなわち，

⑩ Mekrīt　⑪ Qālūchī[6]　⑫ Qārlūq　⑬ Shūlqārchī

がそれである。これらの十三の集団についての説明は後に加える事にして，さらに進んで他の諸集団の名称を，史料の中から抽出してみる事にしよう。

まず，Īsān Būghā Khān の時代（1432～1462）[7]，ハーンが Ṯurfān の Ūīghūr 族出身の Tīmūr なる者を寵愛した為に，諸集団の Amīr 達がこれを不満とし，Tīmūr を殺害してハーンの下を去り，モグーリスターン各地に離散するという事件が起った際に，既に記した Dūghlāt, Kūnjī, Jarās, Bīgchik, Qālūchī の諸集団と共に，Bulaghāchī[8]，Bārīn の二つの集団も，ハーンの下を離れ去ったという（TR, pp., 77～79；TR, ms., 56 a～56 b）。ここにみえる Ūīghūr の名は，皇明実録にも哈密衛の構成分子の一つとしてみえ[9]，Bulaghāchī 集団は，回暦791年（西暦1389年）Amīr Tīmūr のモグーリスターン遠征軍によって Īlā 河(Ili 河）附近で打破られた事がチムール朝の諸史料に記録されている（Niẓām al-Dīn, 116；Ḥāfiẓ-i Abrū, p. 74）[10]。また Bārīn 集団の活動は，Bābur によってもしばしば記録されており（Bābur, pp. 19, 161, 170 etc.），先述の①より⑨に至る九集団と並んで，モグーリスターン社会で重要な役割を演じている事が明らかである。従って，モグーリスターンに活動した遊牧系諸集団のリストに，

⑭ Ūīghūr　⑮ Bulaghāchī　⑯ Bārīn

の三集団の名称を加える事が出来よう。

さらに，Ta'rīkh-i Rashīdī には，Sulṯān Aḥmad, Sulṯān Manṣūr の両ハーンによって滅ぼされた集団として，Arlāt の名がみえる。Mīrzā Ḥaidar によれば，この集団は「古い時代から有力な Amīr 達」を輩出した集団であるという（TR, pp. 121, 339；TR, ms., 83 a, 250 b）[11]。同じく Ta'rīkh-i Rashīdī には，Sulṯān Sa'īd Khān の時

代に，Bahrīn なる集団（qabīle）の活動していた事が記されている（TR, pp. 183, 316; TR, ms., 129 b, 232 b)[12]。これによって，リストに次の二集団の名称を加える事が出来る。

⑰ Arlāt　　⑱ Bahrīn

ところで，モグーリスターンには，以上の諸集団の他に，なお Qīrghīz, Qazāq の両集団が活動していた。前者は，Mīrzā Ḥaidar が「モグールの一部族 qaumī az moghūl」とまで云っている様に（TR, p. 148; TR, ms., 104 b)，モグーリスターン諸ハーンと深い関係を持ち，即位以前の Sa'īd Khān とか，'Abd al-Rashīd Khān らはこの集団と居を共にし（TR, p. 131)，また Manṣūr Khān は，この集団を他の諸集団と共に Chālīsh, Ṯurfān 方面へ強制移住せしめた事が伝えられている（TR, p. 125)。一方，後者は，Īsān Būghā Khān によって Chū 河附近に居住を許されてより以後（TR, p. 82)，歴代の諸ハーンとしばしば交渉を持った。これによって，リストに

⑲ Qīrghīz　　⑳ Qazāq

の二集団の名称を加える事が出来よう。

さて，以上に列挙した諸集団は，それらが集団としてモグーリスターンに活動していた事が十分に確かめられる諸集団であるが，これらの他に，集団としては史料に明確には登場せぬものの，ある集団名が個人の名に附されて史料に現れるものが若干残されている。これらは，集団としては史料に明確には登場せぬものの，その集団名を帯びた個人の存在を通して，その集団の存在を推定出来るものであろうから，以下，それらの名称を抽出しておこう。

まず，モグーリスターンの初代のハーンたる Tūghluq Tīmūr の第一次 Mā varā' al-Nahr 遠征（761 A.H./1360 A.D.）には，Karāīt 部（ūmāq, 以下同じ）の Ulugh Tūq Tīmūr, Arkenūt 部の Ḥājjī Bīg, Qānghlī 部の Bīgīchik[13] が，モグーリスターンの先鋒軍を将いた事が伝えられ（Sharaf al-Dīn, 33)，さらにその第二次遠征（762 A.H./1361 A.D.）に際して，ハーンにかの Amīr Tīmūr の所領安堵を提案したのは Karāīt 部の Amīr Ḥamīd[14] なる者であったというから（Niẓām al-Dīn, 18)，少なくとも Tūghluq Tīmūr Khān の時代には，

㉑ Karāīt　　㉒ Arkenūt　　㉓ Qānghlī

の三集団の存在したことを推定出来る。

次いで，Ta'rīkh-i Rashīdī には，回暦917年（西暦1511年)，Bābur の下を離れて，Andijān の征服に成功した Sulṯān Sa'īd Khān の下に集った Amīr 達の一人として，

前述の Dūghlāt, Dūkhtūī, Barlās, Bārqī, Ītārchī, Kūnjī, Bīgchik の Amīr らの他に，Tūbra Nūyāghūt の名を挙げているから（TR, p. 248；TR, ms., 188 b[15]），我々はリストの最後に，

㉔ Nūyāghūt

の名を加える事が出来よう。

Ⅱ　諸集団の分類

以上によって，モグーリスターンに活動した遊牧系諸集団の名称を史料の中から抽出する作業を終ったので，次にこれらの諸集団の源流ないし集団形成の時期を考えてみる事にしたい。

まず，結論を先に述べると，これらの諸集団は，その集団形成の時期によって，大きく二つのグループに分類出来る。すなわち，第一のグループは，既にチンギス汗帝国の成立する13世紀より以前から，その活動の知られる，古い来歴を誇る諸集団（種族）のグループで，このグループに属する諸集団を考察するに当っては，それらの集団が，如何なる経緯を経て，モグーリスターン社会の構成要素となるに至ったかという，その経緯が最も問題となろう。第二のグループは，モグーリスターン・ハーン国の成立する14世紀以降に，新しく形成された諸集団（父系血縁集団）のグループで，このグループを考察するに当っては，それに属する諸集団が，いつ頃，如何にして形成されたかという点が最も問題となろう。以下，これらの問題点に出来るかぎり焦点を当てながら，先の24の諸集団について少しく考察を加えておこう。

まず，第一のグループに属する諸集団から考察を加える事にする。

① Dūghlāt.　Ta'rīkh-i Rashīdī は，モグーリスターン諸ハーンの歴史であると同時に，この Dūghlāt 集団の歴史でもあるが，その源流については，きわめて不明確な記述しか残していない。すなわち，Mīrzā Ḥaidar は，この集団の源流について，ある箇所では，Kāshghar を中心とするタリム盆地西辺よりセミレチェ南部にかけての一帯[16]は，既にチンギス汗によってこの集団の祖先達に iqṭāʿ（封領）として与えられていたといい（TR, p. 61；TR, ms., 47 b），他の箇所では，これをチャガタイ汗の時代の事とする（TR, p. 7）。さらに Mīrzā Ḥaidar は，この集団の古い時代の長として，Amīr Bābdāghān[17] とか（TR, p. 294），Ūrtūbū の名を挙げる（TR, p. 7）。しかし，これらの人物の活動については，全く記述が見られず，従って何故チンギス汗（あ

るいはチャガタイ汗）が，この集団にタリム盆地西辺一帯の支配権を与えたのかは，全く不明である。従って，我々は，この集団の源流を，他の史料の中に求めなければならないが，これについては，既に Pelliot が指摘している様に[18]，元朝秘史及び Rashīd al-Dīn の中に注意すべき記録がみられる。

まず秘史には，この集団の始祖とみなしうる人物として，朶豁剌歹 Doγoladai なる者がみえ，この人物は Menen Doton の子 Način ba'atur の子と伝えられている（実録，p. 22）。一方，Rashīd は，Dūqlāt 部（＝Dūghlāt）の始祖として，Tūmbine Khān の第八子 Būūljār[19] Dūqlān の名を挙げる（Rashīd, 549; Rashīd/Karīmī, 182）。これを簡単な系図にして示すと，

〔秘史〕　篾年土敦―┬―合赤曲魯克――海　都――伯升豁児――屯必乃薩禅
　　└―納臣巴阿禿児―┌朶豁剌歹┘

〔Rashīd〕Dūtūm Menen――――Qāidū――Bāīsangqūr―┬Tūmbine Khān―┬Būūljār
　　└Dūqlān┘

となり，これを見れば明らかな如く，秘史及び Rashīd は，Dūghlāt 集団の始祖について，三世代に渉る時間的な差異を示している。ところが，この両史料における三世代に渉る時間的差異は，単にこの Dūghlāt 集団の始祖についてのみ見られるのではなく，秘史が那牙勤，巴嚕喇思，不荅阿惕，阿荅児斤，兀嚕兀惕，忙忽惕の六集団の始祖を，全て篾年土敦の孫達とする（実録，pp. 21～22）に対し，Rashīd は，これに対応する Nūyāqīn, Barūlās, Būdāt, Hadarkin, Ūrūt, Mangqūt の六集団の始祖を，全て Tūmbine Khān の子らとする（Rashīd/Karīmī, 185～86[20]）。この事実からすれば，秘史が屯必乃薩禅に附すべき諸事実を篾年土敦に附してしまったのか，あるいは逆に Rashīd が Dūtūm Menen に附すべき諸事実を Tūmbine Khān に附してしまったのか，ともかく一つの事実を，どちらかが誤り伝えたものである事は明らかであるが，今，そのいずれを事実とするかは決定出来ない。諸氏の示教に待ちたい。しかし，いずれにせよ，Dūghlāt 集団の形成は，12世紀以前の古い時代であり，かつ，その集団が，いわゆる Nīrūn 系のモンゴル諸集団の一つであった事は明確である。この集団のその後の活動については，有名なチンギス汗の十三翼の戦に，チンギス汗の軍勢に加担した事が知られる[21]のみで，彼等が如何なる経過をたどって東トルキスターンに居住するに至ったのかは全く不明である。

③ Barlās, ⑰ Arlāt. この両集団は，既に元朝秘史に巴嚕剌思，阿嚕剌惕，Rashīd al-Dīn に Barūlās, Arulāt としてみえるきわめて古いモンゴル系の集団で，Jalāīr 集

団と共にチャガタイ汗国の最も主要な構成分子となっていた事が知られている（Barthold, Ulugh-Beg, p. 9[22]）。従って，その分身が，モグーリスターンに活動していたのも，きわめて当然の事と思われる。かの Amīr Tīmūr が Barlās 集団の出身者である事はあまりにも有名である。

⑩ Mekrīt, ⑭ Ūīghūr. この両集団の内，前者は，Rashīd al-Dīn の Mekrīn (Bekrīn), 元史の滅乞里，皇明実録の乜乞里で，後者は秘史の委兀惕（畏忽惕），Rashīd の Ūīghūr で，共にタリム盆地の東辺に活動したトルコ系の集団である[23]。これらはきわめて古くから名の知られた集団であるが，特に後者は，モンゴルの勃興期に，タリム盆地の東部を中心に，いわゆる西ウイグル王国を形成していた事で有名である。王国の崩解後も，ハミ・トゥルファーンの一帯に居住していたものとみえる。

⑫ Qārlūq, ⑲ Qīrghīz, ㉓ Qānghlī. これらの三集団も，秘史に合児魯兀惕，乞児吉速惕，康鄰，Rashīd に Qārlūq, Qīrqīz, Qanqlī としてみえるきわめて名高いトルコ系の集団で，その活動は，きわめて古い時代から中国史料を通じて知られている[24]。これらの三集団は，モンゴル軍の中央アジア征服の頃には，天山からセミレチエ方面に活動していた事が知られているから，モンゴルに服属して以後も，相変らずその一帯に居住していたものと思われる。

⑪ Qālūchī. この集団は，Rashīd に Qanqlī, Qīpchāk, Qārlūq と並んで Oghūz の分族と伝えられる Qalach 集団（Rashīd, 107～08）の一分身と思われる。この集団は，早い時代に Oghūz の本体より分離して，イラン・アフガニスターン方面に居住するに至ったといわれる[25]が，Mīrzā Ḥaidar は，

> 当時〔Sulṭān Aḥmad Khān の時代〕モグーリスターンには，彼等より多人数の集団（qaum）は存在しなかった（TR, p. 121 ; TR, ms., 83 a)。

と云っているから，相当に強力な集団であったと思われる。

⑮ Bulaghāchī. この集団は，Rashīd に，Keremūchīn 集団とお互いに近接して，Būrqūjīn Tūgūm（秘史の巴児忽真脱古木，バイカル湖の東岸地域）の地と Qīrqīz の国のはずれに居住していたと伝えられるモンゴル系の Būlaghāchīn 集団（Rashīd, 238）の後裔とみられるが，いかなる経緯を経て，モグーリスターンに居住するに至ったのかは全く不明である。

⑯ Bārīn. 秘史に巴阿嚇，Rashīd に Bārīn としてみえる，有名なモンゴル系の集団で，チンギス汗の時代には，アルタイ山附近にその所領を定められていたという[26]から，その後何らかの理由に基づいて南下し，天山地域に活動するに至ったのであろう。

㉑ Karāīt, ㉒ Arkenūt, ㉔ Nūyāghūt. この三集団は，それぞれ秘史の客咧亦惕，斡勒忽訥兀惕，那牙勤，Rashīd の Karāīt, Ūlqūnūt, Nūyāqīn に当り，すべて有名なモンゴル系の集団であるが，これらがいつ如何にして中央アジアに居住するに至ったかは明確に出来ない。

さて，以上の Dūghlāt より Nūyāghūt に至る十四の集団が，第一のグループに属する集団であるが，次に第二のグループに属する諸集団の考察にうつる事とする。

まず，⑥ Ītārchī, ⑦ Kūnjī の両集団について，Ta'rīkh-i Rashīdī に，Tūghluq Tīmūr Khān の歿後，その遺子 Khiẓr Khvāja が，反乱の主謀者 Qamar al-Dīn に殺害される事を怖れた Dūghlāt の Amīr Khudāidād が，自らの配下の内から十二人の男達を選んで Khiẓr Khvāja に従わせ，Kāshghar より避難させたという伝承[27] を伝えた後に，

> その〔十二人の〕内の各人は，最後には Amīr となり，その子孫の多くは，今もなお生存している。その内の一人は Arjrāk で，Ītārchī の Amīr らがその子孫である。Khvārazm の Tājrī が他の一人で，Kūnjī の Amīr らがその子孫である（TR, pp. 51～52; TR, ms., 41 b)。

とみえるから，これらの二集団が，ハーン国の成立以後に，ハーン家に対して功績のあった人物を始祖として，新たに形成された父系血縁集団であった事がわかる[28]。

すなわち，ここには，モグーリスターンにおける新集団形成の一つの型を認める事が出来るが，私はこの型に，② Dūkhtūī, ⑧ Jarās, ⑨ Bīgchik の三集団をもあてはめる事が出来ると思う。

すなわち，まず Dūkhtūī については，Tūghluq Tīmūr Khān の出生とその即位に関するモグールの伝承の中に，既に Dūkhtūī Sharāval なる人物が大アミール (amīr-i buzurg) の一人として登場しており（TR, p. 9; TR, ms., 9 a)，次いで Jarās については，Tūghluq Tīmūr のイスラームへの改宗伝説の中に，Amīr の一人として Jarās なる者が登場し，他の諸々の Amīr らが，Khān に従って直ちに改宗したのに対し，この人物のみが改宗にある条件を持ち出し，それが満たされてはじめて改宗に応じたと伝えられる（TR, pp. 14～15)。最後の Bīgchik については，既述の如く，Tūghluq Tīmūr の Mā varā' al-Nahr 遠征軍の指揮者の一人として，Qānghlī 部の Bīgīchik なる者が存在しており，この人物は，Khān による Mā varā' al-Nahr 征服後，Khān の長子 Ilyās Khvāja を輔佐して，Mā varā' al-Nahr の統治に当ったという（Sharaf al-Dīn, 45)。

想うに，Dūkhtūī, Jarās, Bīgchik の三集団は，これらの Tūghluq Tīmūr Khān と関係を持った有力な人物達を名祖として，新たに形成された集団であろう。19世紀の Kazakh 社会においても，この様な特定の人物を名祖とする集団（clan）が多く存在した事が知られている（Krader, p. 193)。

なお，この第二のグループには，⑳Qazāq を加える事が出来るから（Barthold, Semirechyé, p. 149)，結局このグループには，六箇の集団が所属する事になる。

残る④Bārqī, ⑤Ūrdū-bīgī, ⑬Shūlqārchī, ⑱Bahrīn の四集団の内，④及び⑤の両集団は，後述する如く，この両集団に所属する Amīr 達が，北アジア遊牧民の慣習法 tūra をよく保存継承していたという点からみて，第一のグループに所属する集団であった可能性が強いが，くわしい事は全く不明で，⑬⑱の両集団と共に，その集団形成の時期を知る事が出来ない。

附　表

	グループ I	グループ II	不　明
モンゴル系	① Dūghlāt ③ Barlās ⑮ Bulaghāchī ⑯ Bārīn ⑰ Arlāt ㉑ Karāīt ㉒ Arkenūt ㉔ Nūyāghūt	② Dūkhtūī ⑥ Ītārchī ⑦ Kūnjī ⑧ Jarās ⑨ Bīgchik ⑳ Qazāq	④ Bārqī ⑤ Ūrdū-bīgī ⑬ Shūlqārchī ⑱ Bahrīn
トルコ系	⑩ Mekrīt ⑪ Qālūchī ⑫ Qārlūq ⑭ Ūīghūr ⑲ Qīrghīz ㉓ Qānghlī	モグーリスターン遊牧系諸集団の集団形成の時期による分類	

以上の考察を通じて，モグーリスターン社会が，きわめて古い来歴を誇るトルコ系及びモンゴル系の諸集団（種族）の後裔達と，ハーン国の成立以後に新たに形成された諸集団（父系血縁集団）の，二つのグループから構成されていた事が明らかとなった。特に，前者のグループに，モグーリスターンに活動した過半数の集団が所属していたという事実は，この国が，定着生活をいとい遊牧生活に固執した遊牧貴族達を中心に成立したという，その成立事情[29]と密接に関連をもつものと思われる。それと同時に，所謂‘モグール’なる名称が，単にモンゴル族のみを示す種族的な名称ではなく，そこにト

ルコ系の諸集団と，新たに形成された諸集団とを包含した，一つの大きな政治的集団の名称であった事を注意しておきたい。

Ⅲ　モグーリスターン社会の性格

前節に考察した如く，モグーリスターンには，12世紀以前からその存在の知られる古い来歴を持った諸集団の後裔達が，なおきわめて多数活動していた。この事実は，モグーリスターン社会の性格を考える上に，みのがし難い意味を持つと思われる。何故なら，我々はこの事実を通して，モグーリスターン社会の持つ保守的性格を，ある程度想定しうるからである。ここにいう保守的性格とは，具体的には，モンゴル・トルコ的社会制度の保持・継承という事実を通して，明瞭にうかがう事の出来る性格に他ならない。いま，この想定を明確な事実たらしめる為に，モグーリスターン社会に保持・継承されたモンゴル・トルコ的社会制度のいくつかをとり上げて，検討してみる事にしたい。

1）国家組織

まず第一に国家組織の問題をとり上げてみよう。この問題を究明するに当っては，種々の面からの考察が必要であろうが，史料的な制約の故に，ここでは16世紀初頭におけるモグーリスターンの軍事組織と，ハーン国史一代を通じてみられる Amīr の職掌とを通じて問題に接近してみる事にしたい。

a）軍事組織　まずこの問題について手がかりを与えてくれるのは，Bābur の次の記述である。

> 〔モグールの〕各人は，その祖先達が所持したのと丁度同じ位置を〔軍隊の中に〕所持している。すなわち，右翼に属する者〔の子孫達〕は右翼に，左翼に属する者〔の子孫達〕は左翼に，そして中軍に属する者〔の子孫達〕は中軍に〔その位置を所持している〕(Bābur, p. 155)。

これによれば，モグーリスターンの軍隊が，北アジア遊牧諸国家に伝統的にみられる左右両翼及び中軍の制に基づいて編成されていた事が知られるのであるが，Bābur がこれにつづいて，

> 最も信頼すべき人々は，右翼及び左翼の最先端に行く事になっている。右翼にあっては，Chīrās と Begchīk 部が常にその最先端に行く事を要求している。当時，Chīrās tūmān の Beg は勇猛果敢な Qāshka Maḥmūd であり，有名な Begchīk tūmān の Beg は Ayūb Begchīk であった。これらの二人は，どちらが〔右翼の〕

最先端に行くかを争って，お互に刀を抜き合った。結局，一方が巻狩で最高の位置を占め，他方が戦列で最高の位置を占める事に決ったらしい（Bābur, p. 155)。

と述べているのが，きわめて重要な報道であろう[30]。すなわち，これによれば，先の兵員査閲名簿の⑧と⑨の両集団が，モグーリスターン右翼軍に所属し，かつ又，右翼に所属した諸集団の中で，最も有力な集団であった事が判明するからである。ところで，先の兵員査閲名簿に記された十三の集団の内で，①より⑨に至る九集団は，すべてAmīr を擁する最も重要な諸集団であり，かつ又，これらの九集団は問題の名簿に，この順序で記録されていたのであった。そして今，Bābur の記録を通じて，モグーリスターンに左右両翼の制に基づく軍制が行われており，しかも九集団の最後に位置する⑧⑨の両集団が，右翼の最先端に位置する事を争った右翼所属の最有力の集団であった事が判明した以上，我々が，先の兵員査閲名簿の①より⑨に至る序列の中に，何らかの意味を見出そうとしても，あながち不合理ではあるまい。そこで，この観点から，今一度九集団の序列の持つ意味を考えてみる事にしよう。この場合，Ta'rīkh-i Rashīdī にみえる次の記事は，きわめて重要な意味を持つと思われる。

彼〔Dūkhtūī 部の長 Amīr Dāīm 'Alī〕と Barlās との間には，〔いずれが〕上席〔を占めるかという問題〕をめぐって，深刻な争いがあり，それは当時に於いても，なお解決されていなかった。しかし，Amīr Dāīm 'Alī は後述する Manṣūr Khān との最初の会合の機会まで，出来るかぎり上席を占めた。問題の解決は，Dūghlāt の一員で，前に述べた事のある Amīr Jabār Bīrdī に委ねられ，彼は Dūkhtūī が上位を占めるべき事を決定した。それ以後，Amīr Dāīm 'Alī の Barlās を越えての権利は確立された（TR, pp. 307～07)。

すなわち，この記事によって，先の兵員査閲名簿の第二と第三に位置した両集団の間にも，⑧⑨の両集団の間にみられた争いと，全く同一の争いが存在した事が知られるのであるが，私はこれを，モグーリスターン左翼軍内部での，上席をめぐっての争いと解釈したい。この解釈が許されるならば，先の兵員査閲名簿の②より⑨に至る諸集団の序列は，モグーリスターンの左右両翼を構成した諸集団の序列以外の何ものでもないはずである。問題は，④より⑦に至る諸集団を，どこで左右両翼に分つかであるが，この軍隊の Yāngī Ḥiṣār 攻撃にあたっての軍団配置[31] よりみて，⑤までの四集団が左翼，⑥以下の四集団が右翼に属する集団であったと推定出来る。

Bābur の記事にみえた中軍については，Mīrzā Ḥaidar が，Sulṭān Sa'īd Khān の Yāngī Ḥiṣār 攻撃を伝えた部分で，

ハーン自らは，常にハーンに仕え，いかなる軍団にも所属しない中軍（qūl）の bahādur 達と共にあった（TR, p. 316; TR, ms., 232 b)。

と伝えているから，諸々の血縁的集団より分離してハーンに仕える者達[32]（近衛兵）を中心に構成された，非血縁的集団とみなして誤らないであろう。

なお，ここで注意すべきは，Dūghlāt 集団が，上記の左右両翼の中に特別の位置を定められていなかったという事実である。この事実を如何に解するかは，大いに問題のある所であるが，おそらくこの事実は，Dūghlāt 集団がハーン国内に占めた特別の地位，すなわち他の諸集団より一段上位に位したというその社会的地位[33]によって説明出来るものと思われる。すなわち，左右両翼の中に各集団の占めた位置は，それらの集団のモグーリスターン社会内での社会的地位を反影したものと見なされるが，Dūghlāt 集団のみは，他の諸集団と並列的には並びえない高い社会的地位を得ていたが故に，軍事的組織たる左右両翼内においても，他の集団と並列的に並ぶ事をせず，戦時においては，モグーリスターン軍の要所要所に配置されたものとみられる。

ところで，上述の諸集団が，その集団を母体として，一つの軍事的な単位を構成した場合には，tūmān なる用語を伴って，某 tūmān と呼ばれた。tūmān とは，いうまでもなく「万戸」であるが，上述の諸集団の内，史料に明確に現われるのは，Dūghlāt 万戸（TR, p. 103), Kūnjī 万戸（TR, p. 86), Jarās 万戸（Bābur, p. 19), Bīgchik 万戸（Bābur, p. 161), Bārīn 万戸（Bābur, p. 19）の五万戸である。これらの万戸の下には，さらに qūshūn ないし hazāra なる単位があった（Sharaf al-Dīn, pp. 63-64)。qūshūn については，Mīrzā Ḥaidar が，

Qūshūn の Amīr とは，千人の部下を持つ Amīr の事である（TR, p. 55; TR, ms., 43 a)。

といい，hazāra はいうまでもなくペルシャ語の千であるから，共に「千戸」の意味である[34]。この千戸の下には，百戸の存在を推定出来るが[35]，史料には明確には現れぬ様である。

以上，モグーリスターンの軍事組織を検討した結果，我々はそこに，古来北アジア遊牧諸国家の軍制を特徴づけた左右両翼の制と，十進法的軍事体系の存在を認める事が出来たと思われるので，次に Amīr の職掌を通じて，モグーリスターンの政治組織をうかがってみる事にしたい。

b) Amīr の職掌　モグーリスターンの Amīr（領侯）については，既に嶋田襄平氏の短文ながらすぐれた研究（嶋田，ベク達）があるので，ここでは氏の研究を十分に利

用しつつ，先の遊牧系諸集団との関連に重点を置いて，少しく述べておく事にしたい。

嶋田氏が正しく指摘された様に，Amīr は世襲的な身分であり，Amīr の子は Amīrzāda (Mīrzāda) と呼ばれ，やがて Amīr となった。先に列挙したモグーリスターンの遊牧系諸集団の内，Amīr を擁した事の明らかな諸集団は，Dūghlāt 以下 Bīgchik に至る基本的な九集団 (TR, pp. 306～09) と，Arlāt (TR, p. 121), Bārīn (TR, p. 79), Qīrghīz (TR, p. 141), Nūyāghūt (TR, p. 248) の諸集団であり，これ以外の諸集団には，Amīr の身分を持つ者は存在しなかった[36]。すなわち，Amīr は，モグーリスターンの諸集団の内の，特定の有力集団の支配階級であり，これ以外の集団の支配者達は，長 (sar etc.) とはいわれても，Amīr とは呼ばれなかった[37] (TR, p. 309; TR, ms., 227 b)。上記の特定有力集団には，Amīr 家ともいうべき特定の家系があり，この家系に属する複数の Amīr が存在したが，その内の最高者が imārat (Amīr 権) の所有者であり，その集団の長と認められた (TR, p. 100; TR, ms., 68 a etc.)。既述の如く，これらの諸集団の内，少くとも 5 つの集団は，軍事的な単位たる tūmān を構成したが，その場合にはそれぞれの集団の長が，同時に Amīr-i tūmān すなわち万戸長の職務を兼行し，この万戸長の下には Amīr-i qūshūn すなわち千戸長が存在した (TR, p. 55; TR, ms., 43 a)。

モグーリスターン内部の政治は，ハーンと諸々の Amīr 達・文官達 (ahl-i rāī) との協議に基づいて行われたが[38]，Amīr 達の就任した職務の内で，最も重要なそれが，Ulūs-bīgī (Ulus-begi) の職務である。Ulūs-bīgī は，Amīr al-umarā' すなわち "Amīr 中の Amīr" ともいわれる様に (TR, p. 368; TR, ms., 278 b 及び TR, p. 141; TR, ms., 98 a), Amīr 中の最高者であり，モグーリスターンの政治・軍事の中心であった。この職に就任する事の出来たのは，Dūghlāt の Amīr 達に限られた[39]。

これと並んで重要な職務に Atā-bīgī (Ata-begi) と呼ばれる職務があった。この職は，嶋田氏によって，「未成年のハーン又はハーン位継承者の後見役」と規定されているものであるが，その性質上，ハーンに強い影響力を持った[40] (TR, p. 146)。この職務に就任した事の明らかな者は，Barlās, Jarās 及び Bahrīn の Amīr 達で[41]，その地位は原則的には世襲である (TR, pp. 140～41)。

この他に，Amīr 達が就任した職務の内で，きわめて重要とみられるのが，sar-i daftar と呼ばれる職務である (TR, p. 119)。この職務の内容は，Ta'rīkh-i Rashīdī に説明がない為明確とはいえぬが，恐らくジュチ・ウルスの例[42] よりみて，daftar すなわち「租税年貢一覧表」の管理者と思われる。この職務には，複数の Amīr 達が就

任した。

Amīr 達のはたした他の重要な役割の一つは，彼等の内の高齢者が，長老団ともいうべきグループを形成して，後述するモンゴル的慣習法 tūra の保存・継承に当った事実である。16世紀の初頭においては，Barlās, Bārqī, Ūrdūbīgī の Amīr 達が，この長老団の主要なメンバーであり（TR, p. 307），かの有名な Dūghlāt の Amīr Khudaidād も，tūra に関する権威者であったと伝えられている（TR, pp. 69～70）。

以上，Amīr の職掌についての考察を通じて，モグーリスターンの政治をとり行う重要な職務に，特定集団の Amīr 達が世襲的に就任していた事が明らかとなった。すなわち我々は，モグーリスターンの政治組織が，その社会組織と密接な関連をもつものであった事を確認出来たと思うので，結論を図式的に提示して，本節を終る事にしたい。

モグール・ウルスの構造（概念図）

Khān ―― Dūghlāt (Ulūs-bīgī) ――
- Dūkhtūī（左翼長）
- Barlās (Atā-bīgī)
- Bārqī
- Ūrdū-bīgī
- Ītārchī
- Kūnjī
- Jarās (Atābīgī)
- Bīgchik（右翼長）

（Dūkhtūī～Ūrdū-bīgī：左翼，Ītārchī～Bīgchik：右翼）

2）法　　制

モグーリスターン社会のもつ保守的性格を具体的に現わす事象の一つとして，この社会にみられる tūra の遵守を挙げる事が出来る。トルコ語 tūra (törä)[43] ないしペルシャ語 tūzūk は，チンギス汗によって確立せられた北アジア遊牧民の慣習法 J̌asaγ (yasak) の謂であるが，Ta'rīkh-i Rashīdī の中にはしばしばこれについての言及がみられ，これがモグーリスターン社会の中にもった権威の程をうかがい知る事が出来る[44]。いまは，これについての Bābur の記録を引用するにとどめる。

> チンギス汗は，諸々の規律（tūzūk）を明確に定めたが，モグールの間では，それらが，今日でもなお守られつづけている（Bābur, p. 154）。

3）婚姻制度

婚姻制度に関しては，この社会にみられる嫂婚制（Levirate）の存在を指摘しておきたい。

いま，Ta'rīkh-i Rashīdī の中からその一例を紹介すると，

この子ら〔Dūghlāt の Sānīz Mīrzā の子 Abā Bakr と 'Omar Shaikh〕の母を〔Sānīz の歿後〕モグールの慣例（āyin-i moghūl），すなわち yanggī の慣習（rasm-i yanggī）に従って，〔Sānīz の弟の〕Muḥammad Ḥaidar Mīrzā がめとった（TR, p. 251 ; TR, ms., 190 b)。

とみえる如く，そこには兄の寡婦を弟がめとるという典型的な嫂婚制の存在を認める事が出来る。この他に，Ta'rīkh-i Rashīdī には，従兄の寡婦を従弟がめとった例もあり（TR, p. 330 ; TR, ms., 243 b)，これも又"yanggī の慣習"に従ったものとされている。

ここにみられる嫂婚制が，北アジア諸民族の社会を特徴づける一つの重要なメルクマールである事については，殊更論ずる必要もないであろう[45]。なお，婚姻制に関連して，先に述べた左右両翼の各翼が，それぞれ族外婚の単位（moiety）をなすものであったか否かも，究明すべき問題[46]であるが，史料があまりに乏しく，結論を出す事が出来ないのは，まことに残念である。

4）シャーマニズム的習俗

以上の諸事実と並んで，モグーリスターン社会の持つ保守的性格を具体的に表象するものとして，最後に，この社会にみられるシャーマニズム的習俗の残存を指摘しておきたい。すなわち，Bābur は，回暦907年（西暦1502年），Sulṭān Aḥmad Tambal にむかって出陣しようとするモグーリスターン軍の有様を記して，次の如く述べている。

これ〔軍隊の整列とその査閲〕がおわると，纛がモグールの慣例に従って，喝采を以って迎え入れられた。ハーン〔Sulṭān Maḥmūd Khān〕が馬を下りると，九本の纛が彼の前に建てられた。一人のモグールが，牛の大腿骨に細長い白布を結びつけ，その手に他の一端を握った。他の三筋の細長い白布が〔九本の内の〕三本の纛の竿のヤクの尾毛の真下に結びつけられた。そしてそれらの三筋の白布の一端が，その内の一筋の上にハーンが，そして他の二筋の上に私〔Bābur〕と Sulṭān Muḥammad Khānika〔ハーンの子息〕が立つように運ばれた。布片を握っていたモグールは，それを牛の脚に結びつけ，纛の方を注視し，纛に向って身ぶりをしながら，何事かをモグール語で語った。ハーンとそこに居た者達は，纛に向って qumīz を撒きちらした。笛・太鼓が纛に向って鳴らされた。軍勢は，纛に向って三度鬨の声を揚げて馬に乗り，それからまた鬨の声を揚げ，纛の周囲をギャロップで駆けまわった（Bābur, p. 515)。

この記述には，いささか理解に苦しむ箇所もみられるが[47]，要するに，ここに伝えら

れているのは，モグールの間に行われていた聖なる出陣の儀式である。牛の大腿骨に白布を結びつけたり，あるいは纛に向って身ぶりをしながら何事かを語りかけたというモグールは，明らかにシャーマンとみなされる。すなわち，このシャーマンのモグール語で行う祈禱によって，聖なる「九脚の纛」にやどる sülde tengri[48] は，纛に結びつけられた白き布を通して，ハーンらの体内に到達すると信ぜられていたのに相違ない。纛に向けて qumīz をふりかけるというしぐさも，この儀式のもつシャーマニズム的性格をよく示すものといえる。モグール達が，白い布の中に，呪術性・神秘性を認めていた事については，他にも例証がある（TR, p. 55; Bābur, p. 20）から，我々はわずか一例ではあるが，この Bābur の記録を通じて，モグーリスターン社会に，なおシャーマニズム的習俗が行われていたと考えて誤らないであろう。

む　す　び

以上に考察した如く，モグーリスターン社会は，諸々の遊牧系諸集団をその社会の基本的な構成単位とする部族連合体的社会であり，そこには，tūra の遵守，嫂婚制の風習，シャーマニズム的習俗の残存，それに左右両翼の制と百進法的軍事体系の存在等々にみられる保守的傾向を，きわめて明瞭に認める事が出来た。すなわち，この社会は，13世紀の初頭以来，ユーラシア大陸の各地に成立して多くの異民族をその支配下に屈せしめたにもかかわらず，やがて被支配諸民族の文化的影響を受けて，急速にそのモンゴル的性格を消失していったモンゴルの諸汗国の中にあって，最も長くそのモンゴル的性格を保持・継承した，きわめて特異な社会であったという事が出来よう。

しかしながら，この特異な社会も，時代の流れに抗する事が出来ないのは必定であった。すなわち，北方よりする Qazāq ないし Uzbeg 諸集団の圧迫は，彼等をしてタリム盆地城郭地帯への定住化を余儀なくせしめ[49]，この生活型態上の変化は，彼等の内へのイスラームの全面的な侵透[50] と相まって，その社会にみられる保守的傾向を減少せしめた。すなわち，そこに見られる新たな様相は，部族制的社会構造の消失をはじめとして，tūra に代る sharī'a の尊重，シャーマンに代る Islām 聖職者階級の抬頭，Amīr に代る都市的権力者階級の形成等々によって具現される様相であった。これらの，東トルキスターン史における新たな段階については，先人の研究[51] にゆずって今はふれない。

（筆者は京都大学研修員）

註

1) 主要文献の内，TR, ms. は本田実信氏の将来された microfilm を写真にして利用しえたものであり，Bābur は羽田明教授所蔵本を借用出来た。共に誌して謝意を表する。なお，TR, ms. の葉数は，特に必要と認める場合を除いて記載しなかった。

2) Ross 氏はこれを Itárji とするが，トルコ語 itär+chi（従う者）とみなし Ītārchī と読む。

3) Kūnjī は Kūnchī とも読めるが，今は Ross 氏に従う。

4) Charās, Chirās 等各種の読み方が可能であるが，今は Ross 氏に従う。なお，Bābur には，Chīrās として見えるから（p. 19), Chirās と読むのが正しいのかも知れない。

5) Ross 氏はこれを Begjik とするが，トルコ語 Beg+chik（Beg の如き者）とみなし Bīgchik と読む。

6) Ross 氏はこれを Káluji あるいは Káluchi とするが，Qālūchī を正しい読み方とみなす。後述する如く，この集団は Qalachi の後裔とみなされるからである。

7) Īsān Būghā Khān はその父 Vais Khān の歿後ハーン位に即いた。Vais Khān の歿年は従来1428年（又は29年）とされていたが，これを1432年とみるべき事については前掲拙稿参照。

8) Ross 氏はこれを Balgháji とするが，その集団の種族的系譜よりみて，Bulaghāchī と読むのが正しい。

9) 永元寿典；「明初の哈密王家について—成祖のコムル経営—」，『東洋史研究』22-1, 22～23頁参照。

10) チムールのたび重なるモグーリスターン遠征については，Barthold, Semirechyé, pp. 140～43；Hilda Hookham, Tamburlaine, the Conqueror, London, 1962, pp. 86～90；松村潤，「明初の東チャガタイ=ハン国」，『日本大学史学会研究彙報』7, 21～27頁参照。ただし，松村氏論文では，今問題にしているチムールの遠征の年時が回暦793年となっているが，これは791年の誤りである。なお，Niẓām al-Dīn その他には，この Bulaghāchī（Ḥāfiẓ-i Abrū は Būlaqāchī）集団と並んで Sālūchī（Sālūji）なる集団の名がみえるが，他に例証もないので，今はリストに加える事を保留する。あるいは秘史の撒勒只兀惕(実録，p. 19)，Rashīd の Sāljiūt（p. 472）の後裔であろうか。

11) Ross 氏は TR, p. 121 でこれを Irlát としているが TR, ms. によって Arlāt を正しい読み方とみなす。

12) Sharaf al-Dīn, 338 にも qabīle-yi Bahrīn としてみえるが，これに対応する Niẓām al-Dīn, 114, Ḥāfiẓ-i Abrū, p. 71 には，それぞれ qabīle-yi Bārīn, īl-i Pārīn とするから，Sharaf al-Dīn の Bahrīn は Bārīn の誤りとみなされる。なお Ta'rīkh-i Rashīdī では Bahrīn と Bārīn は勿論別個の集団として登場する。

13) Niẓām al-Dīn, 15 には Bīgīchik の所属集団の名を記さぬが，Sharaf al-Dīn が何らかの根拠に基づいてこれを Qānghlī 部と記したものとみなし，今 Sharaf al-Dīn に従う。なお，この時期の Mā varā' al-Nahr の情勢については，植村清二，「察合台汗国の興亡」(四)，『蒙古』9-1, 87～88頁に詳しい。

14) Amīr Ḥamīd の所属集団について，Sharaf al-Dīn, 44～45 はこれを KRLKWT (Karlukūt) とし，Ḥāfiẓ-i Abrū, p. 14 は KWRLAWT (Kūrlāūt) として，三史料は全く一致しない。今は Niẓām al-Dīn に従っておく。なお Ḥāfiẓ-i Abrū に従うとすれば，これは秘史の豁囉剌思 (実録，p. 94)，Rashīd の Kūrlāūt (p. 216) に当ろう。

15) TR, p. 183 ではこれを Tubra Tiághuth とするが，p. 248 及び p. 264 に見える如く，Tūbra Nūyāghūt と読むのが正しい。ただし，TR, p. 183 に相当する，TR, ms., 129 b も，文字が不明確でこの場合は参考に出来ない。

16) Mīrzā Ḥaidar によれば，この一帯は Mangalāī Sūya と呼ばれたといい，この言葉の意味はペルシャ語の Aftāb rūī と同じだという。Elias 氏は，TR, pp. 7～9, note 4 で，この言葉の意味を詳細に検討されたが，結局 "sūya" の意味が不明の為に，全体の意味も不明確だとされた。一方，Barthold 氏は，これを Manghalay-suba と読み，「先鋒地域」と解し (Barthold, Semirechyé, p. 138), N. N. Mingurov 氏は，Manglai-Sube と読み，「東方の国」と解された (Ch. Ch. Valikhanov, Sobranie Sochinenij v pyati tomakh, Tom III, стр. 465)。しかしながら，Elias 氏によると，氏の参照した写本では全て sūya となっているというから (TR, ms. も sūya ないし sūyā となっている)，たとえ Mingurov 氏らがトルコ語への訳本によられたにせよ，ただちに sube と読む事に賛同するわけには行かない。ペルシャ語 Aftāb rū(ī) は，Steingass 氏によれば，「太陽に面する (土地)」あるいは「太陽の如く輝やかしい顔を持った」の意であり (A comprehensive Persian-English Dictionary, 4th Impression, London, 1957, p. 79)，五体清文鑑によれば「〔日月などの〕明るい光，耀光」の意であるから (田村実造・今西春秋・佐藤長共編，『五体清文鑑訳解上巻』，京都，昭和41年，2頁)，「東方の国」ないし「先鋒地域」とは必ずしも意味が一致しない。結局この言葉の意味は，未だ不明とせねばならない。

17) 前註に引用した Valikhanov の著作集に収められた Ta'rīkh-i Rashīdī のトルコ語訳本では，これを Amīr Bāidakhān とする (Valikhanov, op. cit., стр. 437)。もしこの綴りが正しいとすると，元史巻107，宗室世系表，闊列堅太子位にみえる伯答罕 (*Baidaqan) とか，Rashīd に Chaghatai の曽孫としてみえる Bāīdaghān 等と同じ名前である。Baidaqan なる名前についての言語学的註釈は，Louis Hambis et Paul Pelliot, Le Chapitre CVII du Yuan Che, Leiden, 1945, p. 68 に行われている。

18) P. Pelliot et L. Hambis, Histoire des Campagnes de Gengis Khan, Tom I, Leiden,

1951, pp. 69～70.

19) この名についての各写本間の相違は驚くばかりで，どれを正しい綴りとみるかは，ただちに決定しかねる。今は Rashīd, 549 に従う。

20) Rashīd/Karīmī の集団の名称についての綴字には相当に混乱がみられるが，今 Rashid-ad-Din, Sbornik letopisej, Tom I-ii, Moskva, 1952, стр. 29-30 を参照して訂正した。

21) 十三翼の戦については，本田実信，「成吉思汗の十三翼について」，『東方学』4，61～72頁，に詳しい研究がなされている。

22) 佐口透，「チャガタイ・ハンとその時代」，『東洋学報』29-1，83～84頁にも研究が行われている。なお，Jalāir 集団のモグーリスターンでの活動は，史料には全く記録されていない。あるいは，これはこの集団が，1376年にチムールによってその軍事組織を解体されてしまったという事実（Barthold, Ulugh-Beg, p. 26）と何らかの関係があるのであろうか。

23) Mekrīn 部の歴史については，和田清，「乞克力考」，『東亜史研究蒙古篇』，855～865頁に詳しい。Mekrīt が，有名な Merkit とは異る事は和田，862頁参照。なお，現在タリム盆地地帯の大部分の住民は，ウイグル人と呼ばれているが，少くともモグーリスターン・ハーン国の時代には，ウイグルなる名称が単にタリム盆地東辺の一集団（種族）の名称にしかすぎなかった事は興味深い。ただし，ウイグルの一分派が，Khorāsān にも存在していたという Mīrzā Ḥaidar の記録は注意すべきであろう（TR, p. 311)。

24) これらの三集団の他，Rashīd al-Dīn の「部族篇」にみえる諸々の諸集団（所謂“固有のモンゴル族”を除く）についての簡明な説明が，村上正二，「モンゴル帝国成立以前における遊牧民諸部族について—ラシィード・ウッ・ディーンの‘部族篇’をめぐって—」，『東洋史研究』23-4，118～47頁にみられる。

25) V. Minorsky, Ḥudūd al-'Ālam, The Regions of the World, A Persian Geography 372 A. H.—982 A. D., London, 1937, pp. 347～48 参照。

26) 護雅夫，「元初に於ける‘探馬赤部族’について」，『北亜細亜学報』3，51～52頁参照。なお，モグーリスターンの Bārīn 集団には，KYQADL (Kīqādal ?) なる分族があったらしい (TR, ms., 52 b. ただしこの部分を Ross 氏は訳出していない)。

27) この伝承については，松村潤，前掲論文，20～21頁に要約が為されている。

28) Kūnjī は Sāghārīchī なる別称を持っていたらしい（Bābur, p. 20 と TR, p. 86 を対照せよ)。なお，Barlās にも Ḥimār（馬鹿者）という別称がつけられていたという (TR, p. 146; TR, ms., 103 a)。

29) L. V. Stroeva, Boriba kochevoj i osedloj znati v Chagatajskom gosudarstve v pervoj polovine XIV v., Pamyati akademika Ignatiya Yulianovicha Krachkovskogo, Izdatelistvo Leningradskogo Universiteta, 1958, стр. 206～20 参照。

30) この両集団の上席をめぐっての確執は，16世紀の半ば迄，十分の解決をみずにつづいたという（TR, pp. 308～09）。

31) 軍団は，Yāngī Ḥiṣār 城の西面より南面にかけて，次の如く配置された（TR, p. 315）。Khān と中軍，Dūghlāt, Dūghlāt, Jarās, Bīgchik, Kūnji と Ītarchī, Jarās, Bīgchik, Bārqī, Barlās, Dūkhtūī, Dūghlāt, Dūghlāt。ここには，Ūrdū-bīgī の名が見えぬが，Dūghlāt を別にすれば，この全体を Jarās, Bīgchik, Kūnji Itārchī, Jarās, Bīgchik という一区分と，Bārqī, Barlās, Dūkhtūī の一区分とに分割出来ると思われる。Ūrdū-bīgī の名のみえぬのは，この集団に所属する兵士の数が，他の集団に比べてきわめて少なかった為に，それのみでは一つの軍団を形成しえなかった為と思われる（TR, p. 307）。

32) これに関する史料の一例を示すと，「〔Dūghlāt の〕Mīr Muḥammad Shāh の配下の一人である Jāqīr なる者は，全ウルスに雙ぶ者なき弓の名手であったので，〔Vais〕Khān は Mīr Muḥammad Shāh に乞うて，彼を自らの従者とならせた」（TR, p. 72）とある。なお TR, ms., 52 b は，この Jāqīr を Kīqādal (?) Bārīn 部の出身者としているが，Ross 氏はこの部分を訳出していない（註 26）参照）。なお，16世紀初頭においては，Bārqī 集団の Maqsūd, Ḥāfiẓ, Tūluk らが，Sulṭān Saʿīd Khān に直接従っていたと伝えられている（TR, p. 307）。

33) Dūghlāt 集団がモグーリスターン社会に特別の社会的地位を占めた理由については，前掲拙稿で少しくふれた。

34) qūshūn その他の軍事組織に関連する用語については，Barthold, Ulugh-Beg, p. 27 及びベ・ヤ・ウラヂミルツォフ（外務省調査部訳），『蒙古社会制度史』，東京，昭和17年，302～03頁参照。

35) ホージャ時代に，Tūmān Beg, Ming Beg と並んで Yūz Beg の存在が知られているから（嶋田，ベク達，71頁），百戸の存在した事は，ほぼ疑いない。

36) いま，Qazāq と，モグーリスターン・ハーン国の成立期にしかその活動の知られぬ Karāīt, Arkenūt, Qānghlī はこの規定の対象としない。

37) 嶋田氏はこの事実を「すべての Aymāq の長必ずしもアミールではないが，アミールたる者は必ず Aymāq を持ち，それは一つ以上多数に亘り得る」と表現された（嶋田，ベク達，72頁）。しかし，氏も「ペルシャ語原文に接し得ない現在では，この個所の断定にやや不安を感ずる」と注記された様に，ここで Aymāq なる用語を使用されたのは適当ではない。Mīrzā Ḥaidar は，Aymāq なる用語をわずか二箇所（TR, pp. 67, 301）で使用しているにすぎない為，その用語の内容を決定する事はかなり困難に思われるが，少くともこの二例よりすれば，この用語が中期モンゴリアにおける諸例とは異って，単にタリム盆地南辺地帯の小さな氏族的単位を指すものにしかすぎなかったと思われる。従って，TR, ms., 227 a によって嶋田氏の表現を書きかえれば，「すべての khail（同血縁に属する遊牧民のテント群）の長

(khail-dār) 必ずしもアミールではないが，アミールたる者は必ず khail を持った」となろう。なお khail については H. F. Schurmann, The Mongols of Afganistan, The Hague, 1963, pp. 191～94 参照。

38) 重要事項は，会議の招集を経て後決定された (TR, pp. 284, 421 etc.)。

39) Ulūs-bīgī への就任者を列挙すれば， Amīr Būlājī (TR, p. 38), Amīr Khudāidād (p. 38), Amīr Jabār Birdī (p. 336), Sayyid Muḥammad Mīrzā (p. 132), Sārīq Mīrzā (p. 333), Mīrzā 'Alī Taghāī (p. 368) 等で，全て Dūghlāt である。

40) 嶋田氏は，Ulūs-bīgī と Atā-bīgī を「それぞれ政府官僚と宮廷官廷との最高の地位」とも規定されたが (嶋田，ベク達，72頁)， モグーリスターンで政府官僚と宮廷官僚とを厳密に区別出来たかは疑問である。

41) Atā-bīgī なる職務の事は，モグーリスターン汗国史の初期には史料に全く現われないので，この職への就任者はごく少数しか知る事が出来ない。今これを列挙すると Barlās の Amīr Ghūrī, 'Alī Mīrāk (TR, p. 140), Muḥammadī (p. 141), Jarās の Bābā Sārīq Mīrzā (p. 375), Bahrīn の Khvāja 'Alī Bahādur (p. 140) となる。

42) ア・ヤクボフスキー (播磨楢吉訳)，『金帳汗国史』，東京，昭和17年，117～18頁参照。

43) tūra なる用語の説明は， P. Pelliot et L. Hambis, op. cit., p. 207 ; W. Radloff, Versuch eines Wörterbuches der Türk-Dialecte, Band III, 's-Gravenhage, 1960, s. 1250 にみられる。

44) TR, pp. 70, 307, 344, 351, 374 に tūra への言及がみられる。ただ一つ注意すべきは，16世紀初頭の Sulṭān Sa'īd Khān の時代ともなると，本来ならば tūra に従うべきであるのに，これに従わなかったとする事例が見えている事で，Islām の侵透に伴って，その権威が序々に失われつつあった事は確かである。事実， Sa'īd Khān の宮廷では， Maulānā Muḥammad Shīrāzī が， ṣadr-i ṣudūr (大法官) として， 大きな影響力を持っていたと伝えられている (TR, p. 140 ; TR, ms., 97 b)。

45) 田中克己，「北アジアの諸民族に於けるレヴィレート」，『北亜細亜学報』3, 217～54頁参照。

46) Lawrence Krader など最近の社会人類学者の研究は，しばしば外婚制 (exogamy) の問題を取り扱っており，モンゴル史の分野では，我国でも愛宕松男，『契丹古代史の研究』，昭和34年，京都とか村上正二，「モンゴル部族の族祖伝承 (一) (二)—とくに部族制社会の構造に関連して—」，『史学雑誌』73—7, 8 などの優れた研究が発表されている。

47) いま A. S. Beveridge によって訳出したが， J. Leyden & W. Erskine, Memoirs of Zehir-ed-din Muhammad Baber, London, 1826, p. 103 にみえる訳文はこれと相当異っている。従ってトルコ語原文あるいは M. Salie のロシヤ語への翻訳本を参照する必要があるが，今回は利用出来なかった。本文にみえる「九本の纛」というのは，有名な「九つの脚ある白き纛」

（実録，p. 270；Rashīd/Karīmī，307）の事だと思う。従って，三筋の細長い白布が結びつけられたのは，纛の三筋の旄の下と思われる。なお牛の大腿骨とか牛の脚が何を意味するのかよく理解出来ない。大方の示教をあおぐ。

48） sülde tengri については，ドルヂ・バンザロフ（白鳥庫吉訳），「黒教或ひは蒙古人に於けるシャマン教」，『北亜細亜学報』1，37～38頁；ベ・ヤ・ウラヂミルツォフ，前掲書，330～31頁参照。

49） ただし，モグールの一部が，新興の Qazāq ないし Uzbeg 社会の中に吸収され，その社会の重要な構成分子となった事は，Qazāq の大オルダに於ける Dulat（<Dūghlāt）の存在によっても十分推定出来る（Krader, p. 198 参照）。

50） モグール間への Islām の全面的な侵透には，「〔Yūnus〕Khān は，モグールらが農耕地帯や都市の定住民（vilāyatgīr va shahrnishīn）となる迄は，彼等は真の musulmān とはなれないと常に感じていた（TR, p. 156；TR, ms., 110 a）」と伝えられている様に，モグールの定住化が不可欠なものであった。

51） 羽田明，「明末清初の東トルキスタン—その回教史的考察—」，『東洋史研究』7—5；嶋田襄平，「ベク達」及び「アルティ・シャフルの和卓と汗と」，『東洋学報』34—1～4；佐口透，『18—19世紀東トルキスタン社会史研究』，昭和38年，東京などが代表的な研究である。

〔付記〕 本稿の要旨は，去る7月10日から5日間にわたって長野県野尻湖ホテルで開催された第三回若手アルタイ学・中央アジア研究者集会の席上発表した。その際有益な助言を与えられた諸氏に謝意を表する。

〔追記〕 本稿脱稿後，佐口透氏の「カザーフ＝大オルダの種族集団」，『東洋史研究』25-2；「タルバガタイ辺境のカザーフ遊牧民」，『北アジア民族学論集』3の両篇が発表され，カザーフ社会を構成した遊牧諸集団の実態について多くの新しい事実が明らかにされている。特に前者には，カザーフ社会に吸収せられて後の Dūghlāt 集団の動向について詳細な研究が行われており，教えられる所が多い。